

日本労働年鑑 第50集 1980年版

The Labour Year Book of Japan 1980

第一部 労働者状態

VI 農家の状態と農民の生活

概要

一、一九七八年一月一日現在の農家人口は、前年比一・四%減少し二二二四万人となり、総人口にたいするその割合は一九・五%となった。

一、農家数は、前年より一%の減で四七九万戸となった。

一、都府県農家の階層分化は、二ha以上層で微増し、二ha以下層の零細農家層が減少した。

一、農家の兼業化傾向はいぜん進行している。農家数の絶対的減少にもかかわらず、第二種兼業農家の絶対的増加がつづき、二兼農家の全農家にたいする割合は六九%となった。

一、農業就業人口は前年比二・三%減少し、七八年一月現在七〇六万人となった。このうち女子は六二%を占めている。また基幹的農業従事者は前年より四%減少し四五四万人となった。二九歳以下の若年労働力の減少率が増加し、農業労働力の老齢化はひきつづき進行した。七八年一月現在で、女子と六〇歳以上の男子の基幹的農業従事者は、女子の減少率が高いせいもあって、全体の六九%にとどまった。

一、農家の兼業従事者は前年にひきつづき微増し八三八万人となった。雇われ兼業と自営兼業の構成比、兼業従事者の男女比、雇われ兼業種類別農業従事者の構成比等は前年とほぼ同水準にとどまった。ただ出稼ぎ従事者が微減し、恒常的勤務者、日雇・臨時雇が微増するというわずかな変化がみられた。

一、一九七七年一年間の農家の人口異動は増加六二万人、減少九六万人で、差し引き農家人口の減少は三四万人であった。七六年まで農家人口数の異動をみると、増加・減少いずれも減少をつづけてきたが、七七年にいたってこの傾向には歯どめがかけられた。

一、七七年の一年間に他産業に就職した農家世帯員は対前年比七%増加し五三万人に、他産業からの離職還流者は対前年比一九%増の二五万人であった。差し引き二八万人の農家労働力が農家から流出した。

一、農家世帯からの出稼ぎ者は長期不況を反映しひきつづき減少してきた。七七年の出稼ぎ者数は前年に比べ二%減少し、一六万人となった。

一、七八年三月に中学校以上の学校を卒業した農家子弟は七七万人で前年に比べ一〇%減少した。この新規学卒者のうち自家農業に就業した者は九〇〇〇人にすぎず、新規学卒就業者総数にたいする農業就業率は三・三%に低下した。

一、七七年度の全国一戸当たり平均農家所得は三九八万円で前年度比九%増加した。これは兼業化の進行による農外所得の伸び率一二%増に依存するところが大きかった。他方、農業所得の伸び率が一%程度にとどまったことにより農家所得の農業依存度は三割をわった。

一、七七年一日当たり農業臨時雇い賃金(全国平均)の最高は男の田植作業四七九四円で、前

年比九%増であった。また農村内外の平均諸賃金と比較すると(他産業の臨時日雇い賃金をのぞき)、トラクター運転、大工その他の賃金は田植賃金より最低六%から最高六五%高かった。

日本労働年鑑 第50集 1980年版

発行 1979年11月10日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2001年9月25日公開開始

■←前のページ 日本労働年鑑 1980年版(第50集)【目次】次のページ→■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
